

日物川地区の庚申塔とイヌマキ

日物川コミュニティセンターがある場所は、元は城山東小学校の敷地であり、小学校が建つ以前は観音寺の境内でした。この場所に庚申塔とイヌマキの大樹があります。

庚申とは「かのえさる」あるいは「こうしん」と読み、昔に使用されていた年や月日を表す十干（甲・乙・丙・丁など）と十二支（子・丑・寅など）の組み合わせの一つです。庚申信仰とは、60日に一度巡ってくる庚申の日の夜に眠ると、人間の体内にいる三尸という虫が抜け出して神に罪を告げ、その報告によって寿命が縮まると信じられてきた民間信仰です。

そのため、庚申の夜には眠らずに夜通し語り明かして夜明けを待つという行事が行われていました。庚申塔とは、このような庚申信仰に基づくもので、その多くが江戸時代に建てられました。



庚申塔（高さ 98cm）



イヌマキ

日物川地区の庚申塔は、台座に銘文が刻まれており、天明7年（1787年）に建てられたものであることが分かります。正面には、三尸駆除のご利益があると信じられていた「青面金剛」が童子を従え、青面金剛の使いとされる「見ざる・聞かざる・言わざる」の3匹の猿とともに彫刻されています。この庚申塔は、天明年間（1782～1789年）に連続して発生した「天明の大飢饉」と呼ばれる江戸時代最大の飢饉の時代に建てられています。庚申塔には五穀豊穡や無病息災、悪疫退散などを祈願する信仰もあることから、日物川地区の庚申塔には飢饉の収束を願う先人の祈りが込められていると思われます。現在も、閏年には日物川地区の庚申行事として、お勤めや餅まきが行われています。

また、庚申塔の近くにはイヌマキがあります。幹周が3mを超える樹勢旺盛な大樹で、町の指定文化財になっています。